姉をさがすなら姉のなか

年上お姉さん×４との甘々アパート生活はじめます

神里大和

ファンタジア文庫

2982

目次

プロローグ　在りし日の記憶……5

第一章　再会……8

幕間　《お姉ちゃん》との思い出Ⅰ　43

第二章　紅林鈴音の本性を僕たちはまだ知らない……46

幕間　《お姉ちゃん》との思い出Ⅱ　83

第三章　後川香奈葉に悪気はない……86

幕間　《お姉ちゃん》との思い出Ⅲ　127

第四章　冴木一夏は耐え忍ぶ……130

幕間　《お姉ちゃん》との思い出Ⅳ　171

第五章　一色いなほは笑わない……174

第六章　お姉さんだらけの小旅行に誘われた件……218

エピローグ　僕の性癖を姉属性に歪めたのは誰だ……308

あとがき　317

姉をさがすなら姉のなか

年上お姉×4さんとの甘々アパート生活はじめます

口絵・本文イラスト　ねいび

プロローグ　在りし日の記憶

『ねえ要くん、女の子の下着に興味ってある？』
それは夕暮れの、ぼくたち以外は誰も居ない公園での出来事だった。
名前も知らない、歳も知らない、けれど最近よく遊んでもらっている黒髪のおねえちゃんからそう問われてぼくは戸惑った。
『え？』
『にひひ。下着だよ、下着。要くんは女の子の下着に興味ってある？』
いたずらな笑みを浮かべながら、おねえちゃんが再び問いかけてきた。
『よ、よくわかんないよ……』
『そう？　まあ要くんはまだ五歳くらいだっけ？　なら、よく分からなくて当然だよね』
納得したように言いながら、おねえちゃんはいたずらな笑みを深めていく。
『じゃあさ、お姉ちゃんが教えてあげよっか？』
『な、なにを……？』
『にひっ。女の子の下着に興味が持てるように、実物を見せてあげるっ』

おねえちゃんはそう言ってブラウスをたくし上げると――こともあろうに胸元を見せつけてきたんだ。

『わっ、わっ……！』

ぼくはなんだか混乱して、妙な気分になってしまう。

ふんわりと柔らかそうな二つの膨らみを包むように、メロンとかスイカによくついているあの白いあみあみみたいなレースのブラジャーがあらわになっていた。

『にひひ。ほら、可愛いよね？』

もっと見て、と言わんばかりにおねえちゃんが胸元を近付けてくる。

『や、やめてよ……』

『大丈夫だいじょーぶ。目を背けなくてもいいんだよ？　見ていいの。私がいいって言ってるんだから、見なきゃ損だよね』

おねえちゃんがぼくを抱き寄せて、そのふわふわの胸元に顔をうずめさせてしまう。

『むぐ……！』

『どうかな？　にひひ、女の子の下着は可愛いよね？』

も、もう下着に感想を抱く次元の話じゃなくなってるよ……！

ぼくはおねえちゃんのおっぱいにうもれている。

おねえちゃんのおっぱいはとても柔らかい。

落ち着く反面、なんだかおねえちゃんをどうにかしてしまいたい感情が湧き立ってくる。

なんだろ、この感じ……。

『それはね、要くんが男の子だっていう証だよ？　にひひ、私のおっぱい少しもみもみしちゃってるもんね。小さくても本能には逆らえないのかな？　もぅ、要くんのえっち♪』

からかうように呟いて、おねえちゃんはぼくを解放してくれた。たくし上げていたブラウスをササッと元に戻して、けれどいたずらな笑みは消していない。

『さてと、今日はこれまでかなぁ。それとも～、こっちも見たいかな？』

おねえちゃんは短いスカートをたくし上げようとしていた。

ぼくはごくりと喉を鳴らして、そこに目線を持っていってしまう。

『なぁに要くん、期待しちゃってるのかな？』

『――あ、えと……ちがくて……』

『にひっ。いいんだよ別に。要くんが見たいっていうなら、私頑張っちゃうし』

ニヤニヤと笑いながら、おねえちゃんはスカートをたくし上げていく。

その様子から目を逸らせそうになくて、思わず見続けてしまって、そして――

第一章　再会

「――ハッ……」

がたんっ、ごとんっ、と電車の走行音が僕の耳朶を打った。その走行音こそが今、僕を夢の世界から現実へと引き戻してくれたトリガーだった。

「そっか……」

夢だったんだ――と、ホッとしつつ、なんて夢を見てしまったのかと頭を抱える。

そもそも夢というより、今のは再現ＶＴＲだった。

完全な創作や妄想ではなくて、僕が実際に体験した過去の記憶。

今からおよそ一〇年も前になるだろうか、それは僕の初恋の思い出で……。

《まもなくー、到着致します。お出口は右側です。お忘れ物がございませんように――》

僕の思考を打ち砕くかのように、車内アナウンスが鳴り響く。

もうじき目的地に着くらしい。ひとまず夢のことは忘れて、立ち上がった。頭上の荷物置き場からキャリーバッグを取り出して、降り口となる扉の前に移動する。

電車が停まる。ぷしゅー、と空気が抜けて、扉が開いていく。

降りるとそこは、都会と比べたらまるで人の居ない寂れたホームだった。

改札を抜けて駅舎から出ると、閑散としたタクシー乗り場が広がっていた。

懐かしい……。昔、一時的に暮らしていたこの千石町に僕は帰ってきた。

忘れようのない特別な思い出があるこの土地で、僕はまた暮らすことになる。

※

三月半ば。

高校進学を二週間後ぐらいに控えたある日――両親が突如として海外赴任することになり、僕はそれについていかなかった。

結果として、進学前の春休みに祖父ちゃんと祖母ちゃんが住まうこの町に引っ越すことになって、今こうして到着したんだ。

僕はかりん荘というアパートで一人暮らしをすることになっている。祖父ちゃんと祖母ちゃんは何かあった時に頼る保険といった感じだ。言い方は悪いけれどね。

スマホで地図を開きつつ、僕は今日からお世話になるかりん荘への移動を始めていた。

「ええと……こっちで合ってるんだよね？」

閑散とした表通りを歩いていると、歩道橋の階段部分で一人のお婆さんが重い荷物を抱えながらぜえぜえと息を切らしている光景が目に付いた。
大変だ、と僕はそのお婆さんに駆け寄り、代わりに荷物を持ってあげた。反対側の階段を降りきったところで、その荷物をお返しする。
「いやはや。坊や、ありがとうね」
「いいんですよ。それじゃあ失礼します」
誰かを気遣うことの大切さを僕は知っている。
気遣われ、救われた経験があればこそ、困っている人を無視出来ない。
特にこの町では絶対にだ。
僕が救われたのはこの千石町でのことだから。

※

《今何してるの？》
かりん荘探しを再開していると、そんなラインが届いた。海外赴任の両親についていった結果として僕と離れ離れになってしまった我が妹・もなみからのモノだった。

ちょっと生意気だけれど、家族としてはもちろん好きな妹だ。個人的な趣味に則って言わせてもらうと、姉だったらもっと良かったのにな、と時々思ってしまう。
《アパートを求めてさまよってるところ》
と返信しておく。すると――
《じゃあお兄ちゃん、これ見て英気養って！》
そんな返事と共に画像がすぐに届いた。
なんかのアニメに登場する小柄なチアガールの画像だった。
うぅ……くっ……もなみのヤツ、僕の趣味を知ってての狼藉だねこれは。
《なあ、青臭いロリの画像なんか見せられたら僕の正気度が削られていくんだけど……》
《お兄ちゃんひどっ！　私の今の推しを旧支配者扱いしないでっ！》
《それよりお姉さんキャラの画像はないの？》
《ないよ！　なんでお兄ちゃんはそんなにババ専なの！　きもっ！》
散々な言われようだった。あと僕はババ専じゃなくてお姉さん専だから。
もなみとのやり取りはそこで途切れ、僕はかりん荘探しを再開する。
「あ、ここかな」
それから一〇分ほど歩いたところで、一棟の小綺麗なアパートが見えてきた。

「まず、えっと……大家さんに挨拶しなきゃな」
大家に御用の方はこちら、という張り紙に従って一階の一番隅の部屋に向かった。
インターホンを鳴らして大家さんの登場を待つ。
綺麗なお姉さんだったら個人的には嬉しいけれど、そう都合よくはいかないよね。
するとややあって、はーい、という澄んだ返事と同時にがちゃりと扉が開かれて――
（――わっ、綺麗な人だ……）
僕の視界に飛び込んできたのは、清楚な雰囲気をまとった美人なお姉さん、だった。
ヤバいほどの美人だ！　道中に見かけた三月の桜みたいな色の髪の毛は絹糸のようになめらかで、ニットセーターにロングスカート、その上にエプロンも着用している家庭的なスタイル！　そして何より、エプロンの胸元が内側からデデドンと押し上げられていることに気が付いて、僕は思わず凝視してしまう。す、すごい……！
「あら、君はどちら様？」
僕の邪な視線をよそに、大家と思しき美人のお姉さんはキョトンとしていた。
そ、そうだ挨拶だよ挨拶！　胸をガン見してる場合じゃない！
「えっと、あの、今日からこのアパートでお世話になる予定の晋藤です、って言ったら伝わりますか？」

伝わってくれなきゃ困るんだけれど、それは杞憂で済みそうだった。
「あらあら、君が晋藤さんなの？　あれ？　でも、契約の時にお電話でお話しした声はもうちょっと年配の方だったような……？」
「あ、それ僕の父さんだと思います。代わりに色々と手配してくれたので」
「あらイヤだ、じゃあ私が勘違いしていたのね……恥ずかしいわ」
羞恥で火照り始めた顔をぱたぱたと手で扇ぐ大家さん。
「ここまで迷ったりはしなかった？　平気だったかしら？」
「地図アプリに頼って来ましたから、なんとか」
「そうなのね。でも大変だったでしょう？　今お飲み物を持ってきてあげるわ」
「いえ、お構いなく」
「あら、遠慮はしなくていいのよ？　待っててちょうだいね」
楚々とした所作で、大家さんが部屋の奥に消えていく。
上品で、気遣いも完璧。
そっか、現代の大和撫子はここに居たんだね。うむうむ。
「おまたせ。お手製の紫蘇ジュースしかなかったけどいいかしら？」
「わ、紫蘇ジュースを作れるんですか？　僕好きなんです、祖母ちゃんがよく作ってくれて」

言いながら受け取り、ひと口飲む……ふぅ、冷たいし甘酸っぱくて美味しい。
そんな僕のことを、大家さんがなぜか興奮気味に目を輝かせながら見つめていた。
「(それにしてもラッキーだわ……年配の方がいらっしゃるかと思えば、一気にクラスチェンジしてまさかまさかのショタくんが到来よ……ふふ、うふふ……得した気分ね)」
「え?」
「なんでもないのよ?」
大家さんは真顔に戻っていた。
そ、そっか……なんだか身の危険を感じたのは気のせいだよね。
「ねえそれよりボク、下のお名前はなんて言うのかしら?」
「ぼ、僕はそんな風に接してもらうような歳じゃないです!」
確かに小柄ではあるけれど、春休みが終われば高一だ。小さい子扱いはちょっとね!
「(あぁ……怒った顔も可愛いわ。お小遣いあげたい……)」
「え?」
「なんでもないのよ?」
その真顔やめてくれないかな。ちょっと怖い。
「そんなことより、ちっちゃい子扱いしてごめんなさいね。よしよし」

なんでこの人ナチュラルに頭を撫でてくるんだろう。初対面だよね?　嫌いじゃないけど。むしろ控えめに言って嬉しいけどさ。僕はお姉さん専だからね。
「で、君のお名前はなんて言うのかしら?　マイケル?」
「マイケル要素皆無だと思うんですけど……。その、僕は晋藤要って言います」
「要くんって言うのね。あら、素敵なお名前。私は紅林鈴音よ。鈴音って呼んでくれていいわ。ふふ、かりん荘へようこそ。これから仲良くしていきましょうね?」
大家さん――鈴音さんはそう言うと、僕に握手を求めてきた。
僕はその温かな手を握り返す。
「こちらこそよろしくお願いしますっ。それで、あの、荷物ってもう届いてますよね?」
「ええ、受け取っておいたわ。随分と少なかったわね。中身もお洋服ばかりのようだし」
「急だったもんで――って、なんでしれっと開けてるんですかっ!」
「あら、開けてはいないのよ?　中からショタ臭――じゃなくて洗剤のいい香りが漂ってきたから、それである程度中身の判断が出来たというだけであってね」
なんか今、妙なカタカナ言葉が……。
「それよりほら、要くんのお部屋に行きましょう。荷解きを手伝ってあげるから。ね?」
「わ、分かりました……」

それから僕は鈴音さんに先導されて、新たな生活拠点となるかりん荘二階の一室に足を踏み入れた。両脇に人が住んでいるみたいだから、あとで挨拶しなきゃね。

「うちのアパートはこういう感じなのだけど、どうかしら」

八畳の１ＬＤＫ。風呂トイレ付き。うん、最高だね。洋風で綺麗だし。

「一人暮らしってことだけど、もし何かあれば私を頼ってくれていいからね？　私、要くんのお願いならなんでも聞いてあげちゃうから……ふふ、うふふ」

なんだか邪悪な笑顔に見えるけれど、きっと気のせいだと思いたい。

何はともあれ、僕は大家の鈴音さんと無事に打ち解けられたことに安堵しつつ、一緒に荷解きを開始したのだった。

※

『ほい、要くんに飴ちゃんあげちゃう』

『わっ、ありがとうおねえちゃん。さっそくなめちゃおっと』

『美味しい？』

『うんっ！』

『じゃ、飴ちゃんの対価もらっちゃうね？』

『えっ、タダじゃないのっ!?』

『でもお金を取るわけじゃないよ？　――それっ、ハグからのむぎゅむぎゅ攻撃だ！』

『ひゃあ！』

『にひっ、女の子みたいな声だねえ？　それそれっ、もっとむぎゅむぎゅしちゃうぞ～？』

『や、やめてよーっ！』

※

「――――」

ハッとする。荷解きをしつつ、僕の意識はどこかに行っていた。いや、どこかに行っていたというか、なんか古い記憶がよみがえってボーッとしていた、という方が正しい。

とある《お姉ちゃん》との思い出が脳裏に映像として浮かび上がっていた。

それで荷解きの手が止まっていた。

それはこの千石町での思い出。

さっき夢にも見た幼少期の記憶。

僕を救ってくれた彼女。
初恋の残滓。
忘れられない思い出をくれたあの人は、今どこで何をしているんだろうか。
「要くん、どうかした？　ボーッとしているようだけど、気分でも悪い？」
「あ、いえ、なんでもないですっ」
鈴音さんに心配されてしまったので、僕は気を取り直して荷解きを再開する。
その時だった。
「――はいどもーっ！　こんにちはこんばんはおはようございまーすっ！」
「え？」
玄関の方からいきなり快活な声が響き渡ってきたと思ったら――
どがんっ、と黒い上着にデニムのホットパンツを組み合わせた美白の金髪ギャル系お姉さんが突如として室内へと踏み込んできたのが分かった。……な、何事？
「はいっ、というわけで！　今日はなんとですね～、あたしが住まうアパートに新しい入居者の少年がやってきた、ということでしてっ。ちょっとねえ、今からインタビューしてみたいと思いまーすっ！」
そのギャル系お姉さんはなんか知らないけれど自撮り棒にスマホをセットした状態でレ

ポーターか何かのように明るく喋っていた。え、もしかしてカメラ回ってるの？
「お、鈴音っちも居るねえ！　でもあたしの目的はキ・ミ♪」
自撮り棒を調整して、白ギャルお姉さんが僕にレンズを向けてくる。
な、なんなのこれ……？
「じゃあキミっ、まずはお名前と年齢を教えてくれるかな～？」
急にいかがわしいビデオの冒頭みたいなインタビューが始まったんだけど……！
「あ、あの……あなたは？」
「およ、あたしのこと知らない？　まあ知名度的にはまだ全然だしね、しょうがないか。でもそれはそれとして、あたしはキミを知り尽くしたいの！　さあ、お名前と年齢から教えてくれるかな？　ファーストキスはいつ？　初体験は終わらせたかな～？」
妙な質問を繰り出し始めた金髪お姉さんをよそに、僕は鈴音さんに助けを求む。
「す、鈴音さん……なんですかこの人！　どうにかしてください……！」
「（あらぁ、要くんいいわねその困り顔……お姉さんゾクゾクしちゃうわ）」
「……え？」
「なんでもないのよ？　ええ、今すぐどうにかしてあげるからね？」
そそくさと金髪お姉さんに迫って、鈴音さんはスマホのレンズを指で塞いでくれた。

「こら一夏ちゃん、ダメでしょ？　急な撮影はやめなさい。要くんが怖がっているわ」
「えぇー。でも新しい入居者って動画のネタになるし」
「プライバシーはちゃんと考えてあげなきゃダメよ？」
「んー、まあそれもそっか」
納得したように自撮り棒からスマホを外すと、金髪お姉さんはしゅんとした眼差しを僕に向けてきた。
「ごめんね。怖がらせちゃったよね？」
「えと……べ、別に大丈夫です。困惑してただけなので」
「そう？　じゃあさじゃあさ、改めて撮影させてくれたりは？」
「そ、それは勘弁して欲しいです……」
「ちぇー、残念っ！」
不服そうに唇を尖らせる金髪お姉さんだった。
この人は一体何者なんだろう？
一見するとスレンダーな白ギャルさん。
こういう人に可愛がられながら生きる人生って想像すると楽しそうだ。
ともあれ、この人は多分かりん荘の住人なんだよね？

「その子はね、冴木一夏ちゃんよ。要くんのお隣さん」
「はいはーい！　あたしは冴木一夏！　グーグルの犬やってます！」
「え？」
「動画投稿者。要するにユーチューバーってことよね」
「えぇ！」
鈴音さんの補足に驚いてしまった。
そりゃ今はそういうのが人気な時代だし、僕自身そういう動画を結構な頻度で見ていたりもするけれど、ユーチューバーを実際やっている人に会ったのは初めてだった。
「あはは、まああんまり人気ないんだけどね」
「いや、でも、やってるだけですごいと思います」
自分を発信するのって結構大変なことのはずだ。このご時世色々あるし、その只中に自分をさらけ出すって相当に覚悟がいることだよね。少なくとも僕には出来ない。だから匿名の殻をぶち破っている人は無条件ですごいと思う。
「うぅ……要っちだっけ？　キミ良い子だにぇ……褒めてくれてありがと～！」
「わわっ……！」
どこか感激したような表情で抱きつかれ、僕は照れてしまう。

身長差のせいで僕の顔が一夏さんの胸元に埋まっちゃってるし！
しかも見た目以上におっぱいが大きいし！
「ねえ要っちっ、あたしのことは一夏って呼んでくれていいから仲良くしようねっ！　そして動画のネタいっぱい提供してねっ！」
「ね、ネタの提供はしませんから！　というか離れてください一夏さん……！」
おっぱいに包まれ過ぎて頭がクラクラしてきたよ！
「えぇー、何よぅ何よぅ。お姉さんに引っ付かれるのはイヤな感じかな？」
「い、イヤではないですけど……っ！」
むしろいい匂いで柔らかくてふかふかで最高ですけれど出会って一分も経たずにこれは問題な気がする……！
「ほら一夏ちゃん、そろそろ離れてあげなさいな（ショタを独り占めとか殺すわよ）」
「ん？　鈴音っち何か言った？」
「要くんから離れてあげなさいって言ったわ。嫌がっているでしょ？」
「でもでも、要っちをこうやって抱きしめてあげると収まりがいい感じでさあ、あたしも落ち着くっていうか。それに可愛いからずっとこうしてたいってのもあるし！」
一夏さんが僕をぎゅっとしたまま離そうとしてくれない。

控えめに言って天国な状況なんだけれど、いい加減荷解きを再開したい僕は抱っこを拒否する猫みたいに身をよじって一夏さんから抜け出した。
「ぶぅー、なんで抜け出しちゃうかなぁ？」
少し不満そうに一夏さんが呟く。
フレンドリーで素敵な人だなと思う。新しい環境にやってきた僕にしてみれば、こうして積極的に絡んでくれる人が居るのは非常に助かるしありがたかった。

※

その後、一夏さんにも手伝ってもらって荷解きが済んだ。
荷物の量は本当に大したことがなかったから、配置なんかもあっさりと終わった。
「そうだ要くん、ちょっといいかしら？」
少し休憩していると、鈴音さんに声を掛けられた。
「なんですか？」
「このアパートには一夏ちゃんの他にもう二人、住人が居るの。この隣の部屋に一人と、ちょうど真下にもう一人。もし挨拶に行くなら一緒に行ってあげようかと思ってね」

「いえ、挨拶くらい一人で行けますんで」
「本当？　途中で声をかけられても知らない人についてっちゃダメよ？」
「どういう注意ですか⁉」
実は某夢の国くらいの敷地面積でも誇ってるのかここ！
「まあ要っち可愛いから、鈴音っちが過保護になっちゃう気持ちは分かる分かる」
一夏さんまでそんなことを……。
くぅ、早く伸びろ僕の身長！
「あ、そうだ要っち。キミが挨拶に行く様子を撮って動画にしてもいい？」
「何が面白いんですかそれ！」
はじめてのおつ〇いの超絶劣化版にしかならんでしょ！　再生数〇回不可避だ！
「とにかく僕は挨拶に行ってきますから、お二人は邪魔しないでください！」
のし巻きタオルを抱えて、僕は部屋の外に出た。
「ええと……そっちが一夏さんの部屋だから、こっちがまだ見ぬ住人さんの部屋かな」
僕の両サイドにある部屋のうち、右隣が一夏さんの部屋で、左隣が一色さんという人の部屋らしい。どんな人なんだろう、とドキドキしつつ、僕はインターホンを鳴らした。
すると「はーい」とかの返事もなしに、玄関のドアがゆっくりと開けられ、一人の女性

がおずおずとその隙間から顔を覗かせてきたのが分かった。
顔の位置的に僕よりも小柄な人だった。目が隠れる程度に長い黒髪が特徴的だけれど、彼女の顔はよく見ると小動物のように可愛らしい。
けれど、ほのかに引きこもりの匂いがする人だった。目を合わせてくれないんだ。
「……っ！」
そんな彼女は僕の顔を見るやビビったように玄関のドアを閉めてしまった。
え、何そのドアを開けたら不審者が居たみたいな反応……っ⁉
「あ、あのっ、僕は引っ越しの挨拶に来ただけです！　怪しい者じゃないですから！」
必死に弁明していると――ぎぎぃ、と再びドアがゆっくりと開かれ、一色さんであろう女性が今度は全身を見せてくれた。
小柄な彼女は学生時代に着ていたっぽい紫のジャージを身にまとっていた。
年の頃は判断しにくいけれど、普通に僕よりは年上だと思う。
そんな一色さんはずっとうつむき加減でひと言も発してくれない。
コミュニケーションが苦手な人なんだろうか。
なら僕が紳士に対応しなきゃっ。
「えっと、一色さんですよね？　僕は隣に引っ越してきた晋藤要って言います！　これか

らよろしくしてもらえると嬉しいですっ！」

「…………」

む、無反応。でも僕はめげない！

「あ、あのっ、これタオルなんですけど、よければお好きに使ってください！」

のし巻きタオルを差し出す。これにも無反応だったら虚しくて脱兎の如く逃げ出そうと思っていたのだけれど、少しの間が空いたのちに、一色さんはのそっと僕の手からタオルを受け取ってくれた。良かった、受け取ってもらえたことにホッとする……。

そんな中、一色さんがどこからかスマホを取り出して何かをやり始めていた。どうやら文章を打っているみたいだけれど一体どうしたんだろう？

と不思議に思った次の瞬間、その画面が僕に示されて――

『いえーい☆　タオルありがとう(*^○^*)　これからよろしくね少年！　ちなみにいなほのフルネームは一色いなほだから気軽にいなほって呼んじゃっていいよーん！w』

――性格違い過ぎだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

どうなってるの⁉　え？　言っちゃ失礼だがこの陰キャ丸出しお姉さんが文章の中だとこんなに弾けたキャラになるってこと⁉　ギャップがヤバいよいなほさん！

『どったの？』

「いや、どうかしたのはいなほさんの方ですよね!?」
『ま、これがいなほの平常運転だから慣れてくれると嬉しいんよ』
「は、はあ……」
いなほさんの本体は相変わらずおずおずのオドオドで会話なんてどうにもならなそうな雰囲気しかないんだけれどね。でも文章でだったら意思疎通が可能らしい。性格が別人レベルで変わるっぽいけど。
『さてさて。もうちょっとお喋りしたいところだけれども、いなほ今締め切りがチョーヤバいからまた今度話そうね☆』
「締め切り?」
『いなほね、作家なんよ(・ω・)』
「え、すごいですね」
かりん荘の住人がやけにバラエティに富んでるのは気のせいじゃないよね。
『というわけで、今はこれにて失礼しちゃうんよ☆　アデュー!』
いなほさんはそう記すと、おずおずと小さく手を振りながらドアを閉めたのだった。
なんというか、この落差よ。テンション高めのメッセージを読んだあとの、本体によるオドオドやり取り……――可愛いです、いなほさん。

色んなお姉さんが居るアパートに来られて、僕は幸せだと思いました、まる。

※

それから――
「もう一人の住人はここかな」
僕の部屋の真下にある部屋。ここに最後の住人が居るとのことで、僕は挨拶のためにインターホンを鳴らそうとしたのだけれど――
「――なんけ今のっ!　絶対私の方が先に当ててたじゃろ……ッ!　くぎゃあああああフ〇ック!　死ね!　回線勝ちじゃろどうせ!　リスポーンしたら狩ってやるけぇ、そしたら屈伸と死体撃ちで煽りまくり確定じゃボケナスがあああああぁぁぁッ!」
激怒した感情がこれでもかというほどに乗せられた口汚い言葉（女性の綺麗めな声で）がドアの向こうから聞こえてきたので、インターホンに触れようとした指を思わず引っ込ませる。……え?　何今の?
「あー……要くん、今は挨拶するのやめといた方がいいかもしれないわね」
怒声に驚いて固まっていると、鈴音さんが僕のそばに歩み寄ってきた。

「今の聞いたら分かると思うのだけど、彼女すごく機嫌が悪そうだから」
「ええと……ヤバい人なんですか？」
「やばたにえんよ」
「や、やばたにえんですか……」
「若い子はやばたにえんって言葉をよく使うのよね？」
「……多分もう死語ですけどね」
「……」
「……」
「と、ともあれ、そこの住人はいわゆるゲーム廃人だから近付かない方がいいわ」
なるほど、ゲーム廃人か。
屈伸とか死体撃ちってワードが聞こえてきたから恐らくシューター系のゲームをやっている人なんだろうか。ＦＰＳやＴＰＳは僕もやる側の人間だけれど、その手のゲームをプレイする人たちは一部がヤバいというか、下手くそに対して煽りメッセージを送り付けたりするっていうね……。僕も送り付けられたことがあるけれどひと晩中泣いたよ。
「じゃあ……この人への挨拶は後回しにしときます」
「そうなさいね。要くんに何かあってからじゃ遅いんだもの」

なんかもう扱いが災厄みたいだった。そんなにヤバい人なのかな……。
「それはそうと要くん、いなほちゃんに挨拶出来ただけでもあなたは上等よ。彼女も相当気難しいタイプなのだし」
「ね、あたしもいなほっちと打ち解けるのは大変だったなあ」
気付けば一夏さんもやってきていた。
「本体とメッセージが別人レベルに違うって言っても結局は同一人物だからさ、本体が興に乗らないことにはメッセージなんて貰えないっていうね。そんな中でいなほっちと挨拶が出来たってことは、要っちにはいなほっちの興味を引く何かがあったってことだよ」
どうやらいなほさんと無事に挨拶出来たのはそれなりにすごいことらしい。
なんだろう、いなほさんに一目惚れでもされてしまったとか？
いやそれはないか。
「いなほちゃん、要くんの小柄なところにシンパシーを感じたのかもしれないわね」
それはなんだか喜んでいいのかどうか微妙なんだけど……。
「もしくは、要っちの根暗っぽいところに共感を覚えた可能性もあったりして？」
それも素直には喜べないよ……！
「なんにせよ、これで要くんの挨拶回りはひとまず済んだわけよね。だから改めて、これ

からよろしくお願いするわね、要くん」
「はいはい！　あたしもね要っち！　同じアパートの住人として仲良く暮らしていこ！」
鈴音さんと一夏さんにそう言われ、僕は心底安心する。いきなりの引っ越しでどうなることかと思っていたけれど、いい住人に恵まれたように思える。
一人だけまだよく分からないけれど、近いうちにきちんと話せるといいな。

※

僕はその後、祖父ちゃんと祖母ちゃんのところにも挨拶に向かった。毎年長期休暇を生かして遊びに来ていたので、久しぶりではなかった。
祖父ちゃん祖母ちゃんと別れてかりん荘に戻る道中、空はオレンジ色に染まっていた。
今夜は鈴音さんが歓迎会を開いてくれるらしいから、それを楽しみにしている。
――この町での新たな生活。
いい思い出がばんばん作れそうな一方で――
ふとよぎるのは幼少期の記憶。
小さかった僕の、この町での思い出。

『要くん、一緒に遊ぼ？』
僕を孤独から救ってくれたあの人。
『にひ、要くんは甘えんぼさんだね』
それは初恋だった。
『じゃ、また遊ぼうね？』
それは叶うことのない一方通行な感情だった。
とても魅力的だったあの人は僕の頭の中に今も居続けている。
それはアップデートされていない一〇年前の記憶。
僕はあの人の今を知らない――だから気になるんだ。
あの人は今、どこで何をしているんだろうって。

※

「あ、要くんおかえりなさい」
かりん荘に帰り着くと、軒先を掃き掃除している鈴音さんと出くわした。
「お祖父さんとお祖母さんはお元気だったかしら？」

「はい、ぴんぴんしてました」
「あら、それはいいことね。じゃあぼちぼち歓迎会を始めようと思うから、要くん、私の部屋に来てもらえる？」
「分かりました」
祖母ちゃんに持たされたお土産（大量のお菓子）を自室に置いてきたのち、僕は鈴音さんの部屋を訪ねた。そこには一夏さんの姿もあった。
「よっ、主役の到着だねっ！」
ぱんっ、と一夏さんがクラッカーを鳴らしてくれた。
「ねえ要っち、このままカメラ回しちゃってもいい？　歓迎会の様子をあたしのチャンネルに投稿したいんだよね。どう思う？」
「え、それは普通にやめた方がいいんじゃ……」
身内ネタって一定の知名度がないと一番つまらないパターンだからね。
「マジレスきたーっ！　でも確かにそうなんだよねえ。んー、どうしたら面白い動画が撮れるかなぁ。――あ、そうだ！　鈴音っちが水着になってくれれば――」
「はいはい静かにね一夏ちゃん。お料理を並べるから騒ぐのはおしまいよ」
鈴音さんが台所から料理を持ってやってきた。唐揚げエビフライたこ焼きチャーハンエ

ビチリビーフシチューナポリタンオムライスカレー――ってどんだけ持ってくるの⁉
「要くんが好きそうな料理を厳選してみたわ。腕によりをかけて美味しく作れたはずだから、好きなだけ食べてちょうだいね？」
見事なまでに子供が好きそうなモノばかりだ。
僕がそんなに子供舌に見えるのか？
正解だけれど。
それにしても、この見た目で料理上手ともなると、鈴音さんは嫁力が高過ぎるよ。
「そういえば主催者の鈴音さんを除けば、一夏さんだけなんですね。僕の歓迎会に参加してくれたの」
「いなほちゃんは締め切りに追われているのと、そもそも群れるのが苦手っぽいのよね」
「もう一人のアレはゲームで忙しいってさ」
いなほさんはしょうがないにしても、謎のもう一人は堂々と欠席しやがったようだ。
まあ趣味を優先させたい気持ちは分かるから文句は言わないでおこう。

※

それから僕の歓迎会が始められて、その場は三人だけでも充分に盛り上がった。
楽しい時間はあっという間に過ぎ去って――
気が付くと僕は自分の部屋に寝転がっていた。
「……もう食えないよ」
日付がまもなく変わろうかという時間帯。
鈴音さんの料理をたらふく食べたので、今日だけで増量したのは間違いない。
満腹で、満足だった。
けれど何かが物足りない。
すごく楽しい時間を新しく過ごせても、この町には忘れられない過去がある。
この町の思い出としては、いや僕の生涯史上の思い出としてはそれが最上で、今夜の歓迎会さえも霞ませる。
霞ませて、浮上してくるその記憶。
――《お姉ちゃん》
それは僕の嗜好を変えてしまった存在。
一〇年前の僕を虜にしてくれた存在。
彼女の影響で僕は――

――かこんっ。
と。
唐突に物音が鳴って、僕はビクリとした。
「な、何……？」
玄関の方からだった。
郵便受けに何かが入れられたような物音が聞こえてきた。
こんな時間に配達？
ありえない。
でも物音が鳴ったのは確かで……。
「……」
気になった僕は体を起こした。立ち上がる。常夜灯オンリーの室内を恐る恐る進んで玄関にたどり着いたあとは、サンダルを突っかけて意を決して外に出た。
素早く廊下の左右に目を配るが、誰の姿も見えなかった。
ホッとしつつ、しかし思う。
――誰かが絶対に居たはず。
そしてその痕跡が、郵便受けに残されていた。

「……紙？」
厳密に言えば、折り畳まれた一枚のメモ用紙だった。
少し不気味に思う。
「一体誰がなんの目的で……」
疑問を抱きながら、僕はそのメモ用紙を開いた。
『久しぶり。大きくなったね』
メモ用紙にはたったそれだけの言葉が記されていた。
だけれどそれは、僕にあまりにも充分な衝撃を与えてくれた。
「《お姉ちゃん》……？」

――およそ一〇年前。
小学校に進学するよりも前の時期に、僕はこの千石町で暮らしていたことがある。
今はそうでもないけれど生まれつき体が弱かった僕は、都会に住まう両親のもとではなく、比較的自然が多いこの町で祖父ちゃんと祖母ちゃんのもとに預けられて療養していたことがあった。
療養と言っても寝たきりとかそういう状態ではなかった。

都会の空気が合わなかった僕は、この町ではむしろ元気に過ごせていた。
だからよく外で遊んでいて――
でも友達は居なかったから、祖父ちゃんや祖母ちゃんと遊びに出かけるか、あるいは一人で遊ぶことが多かった。祖父ちゃんと祖母ちゃんには農家の仕事があったから、一人で遊ぶ機会の方が多かったように思う。
孤独だった。
寂しかった。
しかしそんな時、僕は出会うことになる――名前も知らない、歳も分からない、中学生か高校生ほどの見た目をした黒い髪の少女《お姉ちゃん》に。
《お姉ちゃん》は明るく愉快で楽しい人間で、僕はそんな彼女とよく遊ぶようになった。
おかげで孤独ではなくなり、寂しくもなくなり、僕の心は救われたんだ。
この救われた経験があればこそ、僕も誰かを気遣える人間になろうと誓った。
そしてそれ以上の影響として、僕は年上のお姉さんが好きになってしまった。
《お姉ちゃん》はえっちな人だった。たかだか五歳程度の僕にとても刺激的な接触を続けるような、とてもイケない人だった。
そうした接触をされ続けた結果として僕は《お姉ちゃん》のことが好きになって、その

好意から連鎖するように年上のお姉さんばかりを追い求めるようになってしまったんだ。

ともあれ、小学校への進学を機に都会へと戻ることになった僕は、それ以降《お姉ちゃん》とは会えていない。

僕の初恋は中途半端に途切れ、終わった。それでも当時の興奮が忘れられず、長期休暇中に祖父ちゃんと祖母ちゃんに会うためにこの町を訪れた際は、二人と居ることよりも躍起になって《お姉ちゃん》捜しを行なったりもしていた。

しかしあまりにもヒントが少なかった。

僕は彼女の名前を知らなかった。

歳も知らなかった。

捜しようがなかった。

だから諦めて、《お姉ちゃん》への想いは綺麗に心の奥へとしまったはずだった。

それなのにこの町へと舞い戻ることになって、当時の思い出を夢にまで見てしまい、くすぶっていた炎が再度点火しかけていた。

そこに――このメモ用紙。

『久しぶり。大きくなったね』

この町で、僕にこんな言葉をかけてくれる存在が居るとすれば、それは祖父ちゃんか祖母ちゃんか、あるいは《お姉ちゃん》だけだった。

夕方に会った祖父ちゃんと祖母ちゃんがこんなメモ用紙を残していくわけがない。

だとすれば――

「――……《お姉ちゃん》……」

僕は少し泣きそうだった。

もう二度と出会えないだろうと思っていた憧れの、初恋の人からのメッセージ。

嬉しさで胸が押し潰されそうな中で、僕は疑問を抱く。

「でもどうしてこんな、遠回りな……」

わざわざメモ用紙で言葉を届けに来たのはなぜ？

直接会いに来ないのはなぜ？

相変わらず謎だらけな人だけれど、それでもひとつ確信する。

――《お姉ちゃん》はきっとこの町に居るんだ。

この町に居て、僕を見てくれている。

直接訪問出来る程度には近くに、あの人は居るようだった。

そう考えてハッとする。

「まさかかりん荘の誰かが《お姉ちゃん》なんじゃ……？」
いや、と否定しようとして、その否定しようとした思考を否定する。
ありえないとは言えないはずだ。その可能性はあるはずだ。こんな深夜にメモ用紙を投函しに来られたのは、それだけ気軽に来られる距離で生活しているからなんじゃ……？
「でも……」
証拠がない。
かりん荘の誰もが無関係で、《お姉ちゃん》が別に居る可能性だって当然あるだろう。
それでも疑いの目を持っておくことは重要だと思う。
誰が《お姉ちゃん》かは分からないけれど、近くには居るはずだから。
そしてそう、今はそれさえ分かっていればそれでいい。
近くに居るって分かっただけで、ひとまずは充分だった。
「――いずれ必ず、見つけてやるからね」
どこかで僕を見ているのであろう《お姉ちゃん》への宣戦布告。
それを口にしたのち、僕は気分良く部屋に戻ってこの日は就寝したのだった。

幕間　《お姉ちゃん》との思い出　Ⅰ

『ねえ要くん、君っていつも一人でこの公園に居るけどさ、お友達とかは居ないの？』
夕暮れの公園。ひとけのない寂れたその場所で、ぼくは名前も歳も知らないおねえちゃんとたびたび出会っていた。
『うん……ぼくね、こっちの人じゃないから、友達は居ないんだ』
『あれ、こっちの人じゃないの？』
『そうだよ。体が弱いから、じいちゃんとばあちゃんのところに預けられてるの』
『要くんにはこっちの空気がいいってこと？　まあ田舎だからねえ。ちょっと歩けば田んぼと森があるんだもん、空気がいいってのはその通りだよね。もっとも、この町が誇れるモノなんて空気しかないとも言えるんだけどさ』
自虐するように言いながら、おねえちゃんはぼくを見る。
『じゃあ要くんって、お父さんやお母さんと離れて暮らしてるってこと？』
『うん』
『寂しくないの？』

『じいちゃんとばあちゃんが居るからそうでもないけど、でも……ひとりで遊んでるときとかはさびしいかもしれない……』
『そっかぁ。でも今は私が居るから寂しくないよね？』
『う、うん……』
素直に頷いたは良かったものの、面と向かって認めるのは恥ずかしくもあった。
『あ、頬を赤くして照れてるぅ～。や～ん、もうっ、要くん可愛過ぎっ！』
おねえちゃんは半分だけ地面に埋まったタイヤの遊具に座りながら、ぼくをガバッと抱き寄せた。
『わわっ……！』
『よちよち、大丈夫だからね？　寂しさなんて私が吹き飛ばしてあげちゃうからねっ』
『む、ふぐっ……！』
おねえちゃんの胸元にむぎゅっと抱擁され続け、ぼくは息苦しいったらありゃしない。
『お、おねえちゃん……わふ……っ、そんなに強くしないでよ……っ！』
『でもこうやってされるの良くない？　にひ、おっぱいふかふかで気持ちいいよね？』
『こ、こういうのははしたないことだって、むふっ……、何かで見たよ……！』
『いいのいいの。これは要くんにだけの特別サービスだからねっ。こんなこと、同じクラ

スの男子とかには絶対にやってあげないんだぞ～？』
そう言って、おねえちゃんはぼくをハグし続ける。
ぼくはイヤだイヤだともがきつつも、なんだかんだ抜け出さないまま、おねえちゃんに体を預けてしまう。
おねえちゃんはとてもいい匂いで。
おねえちゃんはとてもいい感触で。
おねえちゃんはとてもあったかくて……。
『……次会ったときも、またこうしてくれる？』
『おやおや～、要くんったら私の虜になっちゃったのかな～？』
『そ、そうじゃないけどっ……！』
『にひひっ、いいよ大丈夫っ。次もまたむぎゅってしてあげるからね？』
頭を撫でながらのその言葉は、ぼくの心を満たすのに充分な威力を誇っていた。

第二章　紅林鈴音の本性を僕たちはまだ知らない

「うわぁ、やらかした……」

太陽がさんさんと照り付ける三月半ばのある日、僕は朝から怠惰を極めていた。新たな住まいとなったかりん荘の一室で、布団に寝転がりながらソシャゲを起動している。そして無課金至上主義なりに頑張ってコツコツ貯めた石でガチャを回してみたら目当てのモノが一切出なかった悲しみで枕を濡らしそうになっているところだ。

春休みだから自由に過ごせる反面、この町はそんなに見所もないし、それゆえに朝からこうして部屋に閉じこもってソシャゲをプレイしているわけだけれど――

「これはさすがに良くない気がする……」

もっと他にやるべきことがあるはずだ。

たとえば来る高校生活に向けての勉強とか。

あるいはそう――《お姉ちゃん》捜しとか。

そう考えつつ、僕は布団から這い出る。部屋に備え付けの机に向かう。

そこには、数日前に届いたメモ用紙が置いてある。

『久しぶり。大きくなったね』

そんな言葉が記された《お姉ちゃん》からのメッセージ。

一体どこの誰がこれを届けに来た《お姉ちゃん》だというのか。

夜中にこのメモ用紙を届けに来られるくらい、《お姉ちゃん》は僕の近くに住んでいるのだろう。

したがって、このかりん荘の住人が怪しいんじゃないかと思っているのだけれど、

「……どうなんだろう」

まだ分からない。

全然分からない。

だからここから地道にヒントを探すなりなんなりしていかないといけない。

ピンポーン、とその時、部屋のインターホンが鳴らされた。

誰だろう？　僕は玄関に移動し、ドアスコープから外の様子を窺う。

すると――

（あ、鈴音さんだ……）

ドアの向こう側に立っていたのは大家の鈴音さんだった。

桜色の髪を風に揺らめかせつつ、今日も胸元を強調させるニットセーターを着ているの

が素晴らしいと思う。その上には紺のエプロンも着用しているのだけれど、巨乳はそれに覆われるどころかニットセーターごとエプロンからむちっとはみ出していた。相変わらずすごいおっぱいだ。はちきれんばかり、っていうはこのことだろうね。

（でもなんの用かな……？）

僕はひとまずドアを開けた。ひんやりとした風が流れ込んできて、鈴音さんのいい匂いも同時に僕の鼻を撫でていく。

「あ、おはよう要くん。春休みなのにお寝坊さんじゃなくて偉いわね」

「おはようございます、鈴音さん。何かご用ですか？」

「用というほどの用はないのだけど、夜にきちんと眠れているか気になったの。引っ越して環境が変わったわけだから、もしかしたらここのところ眠れない夜を過ごしているんじゃないかと思ってね。どう？　きちんと眠れているかしら？」

鈴音さん、わざわざそんなことを気にして訪ねてくれたのか。ありがた過ぎる。

「全然大丈夫ですよ。ご心配には及ばないです」

「そう？　なら良かったわ」

そう言って微笑む鈴音さんが天使に見えた一方で、僕はその天使の全身をまじまじと眺める。見とれている、のではなくて、鈴音さんが《お姉ちゃん》か否かを探っている。

僕の記憶にある一〇年前の《お姉ちゃん》は黒髪で、おとなしい性格で、学生にしては発育のいい体をしていた。

そんな《お姉ちゃん》を基準とした時に、鈴音さんはまず髪色が違うけれど、髪の毛なんて幾らでも染められる。性格は鈴音さんの方が大人しめではあるものの、年月を経て落ち着いただけかもしれない。体は鈴音さんの方がグラマーなのは確実だが、こちらも年月を経て更に育ったんだろう、と言えるわけで。

……あれ？　ひょっとして鈴音さんが《お姉ちゃん》……？

いや待て待て、そう決め付けるのは早計だろうよ。

顔付きが微妙に違う気がするし。

そもそも鈴音さんは先日、僕に初対面の反応を見せたんだぞ？

でもそれが演技だったら話は変わってくるわけだし……。

「要くん、どうかしたの？　じーっと私を見ちゃって」

「え？　あぁいや、なんでもないですっ」

僕はとりあえず思考を切り上げた。鈴音さんが《お姉ちゃん》かどうかなんて、もう少し鈴音さんを観察してみないとなんとも言えない……。

「本当になんでもない？　調子が悪いなら言わなきゃダメよ？　ちょっといいかしら」

鈴音さんがいきなり僕のおでこに自分のおでこをくっつけてきた。
「す、鈴音さん……っ⁉」
「どうやらお熱はないようね」
「な、ないですよ！　本当になんでもなくて、単にぼーっとしてただけですしっ！」
「それならいいのだけど」
鈴音さんは大人しく引き下がってくれた。……そういえば今日の鈴音さんは楚々として落ち着いている。先日は僕を妙な目で見ている感じが節々で感じられたのだけれど、あれはやっぱり気のせいだったのかな。
「ところで要くん、このままお邪魔してもいいかしら？」
「え、なんでですか？」
「お掃除やお洗濯を引き受けてあげようと思ってね。そういうの慣れてないでしょう？」
「まあ……」
掃除は苦手だし、備え付けの洗濯機は使い方がよく分かっていないのが現状だ。
「ふふ、男の子はそんな感じでいいと思うわ。だからこそ、私に任せてくれるかしら？」
嗚呼……僕は理解したよ。この人は天使じゃない。もはや女神だ。清掃と清楚を司るどこぞの神話の一柱に違いない。後世まで語り継いでいくしかあるまいね、これは。

「どうぞ鈴音さん、幾らでもお任せしますよ」
「ほんとに？　じゃあお邪魔させてもらうわね」
かくして僕の部屋に入室した鈴音さんは――
「（す、数日使ってもらっただけでもうこんなにもショタ臭が……！）」
と、何やら小声で呟きながら目を輝かせていた。
……なんか怪しい感じが出てきたような？
「あ、あの……僕も何かお手伝いしましょうか？」
「え？　ううん、お手伝いはしなくていいわ。要くんはくつろいでてちょうだいね？」
優しくそう言われてしまったので、僕は鈴音さんによる清掃を見守ることになった。

※

「あー……いいなぁ～……要っちは羨ますぃなぁ～……」
数分後。ふとそんな声が聞こえてきたので振り返ってみると――換気のために開けっぱなしの玄関から、お隣の白ギャルユーチューバー・一夏さんがこちらを幽鬼じみた表情で見つめているのが分かった。

「わっ……！　え、えっと……おはようございます、一夏さん」
「うん、おはよ……要っちになりたいだけの人生だった……」
「い、いきなりなんですか？」
「だって鈴音っちによるお掃除オプションとか羨ましいじゃん！　何それ！　あたしは今からこうして自分でまとめた燃えるゴミを出しに行くところなのにさ！」
一夏さんの手にはパンパンに膨れた燃えるゴミの袋が持たれていた。
「同じアパートの住人なのに何この格差！　おい鈴音っち！　要っちだけ贔屓すんのはやめなよ！　この露骨な贔屓を動画にまとめて炎上させちゃうぞ！　ＢＯＯＯＯＯＯ！」
一夏さんが左手を逆サムズアップ状態にしながらブーイングしていた。
「……朝からやかましい子ね、一夏ちゃんは」
僕の部屋を掃き掃除している鈴音さんが、呆れた表情で玄関に視線を寄越した。
「あのね一夏ちゃん、あなたは成人したオトナでしょう？　対する要くんはまだ中学校を卒業したばかりの子供なの。庇護対象なのよ。管理人の私には未成年の入居者である要くんを見守る義務があるし、私自身そうしたい気持ちがあるからこうしているの。――そもそも一夏ちゃん、あなた程度のチャンネルに載せたくらいじゃ炎上しないでしょ？」
「ぐはっ……！　やめて鈴音っちぃ……っ、痛いところ突かないで～……っ！」

「秘孔まみれの一夏ちゃんが悪いのよ」
「ひでぶっ!!」
……一夏さんが少し可哀想になってきたので、僕は一夏さんサイドとして口を挟む。
「まあでも、今はちょっとしたことでバズりますし、チャンネルの規模と炎上の確率は比例しないと思いますよ」
「そうだそうだ！　今は何があるか分からないんだよ鈴音っち！」
「だとしても、お掃除オプションは未成年のみだから一夏ちゃんは我慢なさいね？」
「むぅー……未成年のみっていうのがさあ、それホントなの鈴音っち？」
「何が言いたいのかしら？」
「いやね、なんかその理由がさ、要っちのお世話をしたいがゆえの大義名分にしか聞こえないんだよね。だってほら、鈴音っちってショタ――」
「――ねえ一夏ちゃん、家賃二倍になりたいのかしら？」
そのひと言はとんでもない威圧感を伴っていた。蛇に睨まれた蛙のように、一夏さんは硬直して言葉を途切れさせ、僕さえも怖じ気付く。……ところで、ショタがどうしたって？
「ご、ゴミ捨ててこよーっと」
ややあって動き出した一夏さんが、逃げるように階段を降りていく。

鈴音さんが、真顔で僕に視線を移していた。
「ねえ要くん」
「は、はい……？」
「あなたは何も聞かなかった。いいわね？」
「は、はいっ……！」
そ、そうさ、僕は何も聞かなかったんだよっ。ショタがどうとか忘れちゃったよねっ。
「あら、素直でいい子ね。じゃあ引き続きお掃除しちゃうから、要くんも引き続き何もしないままくつろいでてちょうだいね？」
「い、いや、やっぱり手伝いますよ。自分の部屋のことですし」
「まあ、なんて素敵な心遣いなのかしら……泣けるわ」
ガチで潤んでるじゃないか！
そんな感情豊かな鈴音さんと一緒に、僕は改めて掃除を始めることになった。

※

『うぅ……いたいよぉ……』

『あ、要くん大変っ！　転んですり剝いちゃったんだね……――じゃあはいっ、あそこの水飲み場で傷口洗って、この絆創膏で塞いじゃおっか』
『うん……ありがと、おねえちゃん』

※

「――――」
ハッとする。掃除が一旦休憩となった室内でソシャゲをしながら、僕は気が付くと《お姉ちゃん》との過去を思い返していた。
《お姉ちゃん》はハチャメチャな人でありつつ、色々と気が回るというか――言うなればそう、母性があったように思う。
今、僕の部屋を掃除してくれている鈴音さんはまさに地母神かってくらいの気配りをしている真っ最中だと思うのだけれど……どうなんだろ、この人は《お姉ちゃん》なのか、あるいはまったくの別人なのかな。
《ねえ、あまり無視されると寂しいわ》
思索に耽る僕をよそに、手に持つスマホからそんな音声が流れてきた。今起動している

ソシャゲの放置ボイスだった。これ五分おきだから、そんなにぼーっとしていたのか。
「あら、要くんもそのアプリをやっているのね？」
休憩中でも僕の布団をベランダに干したりしている鈴音さんが、放置ボイスを耳にしてだろうか、そんな風に食いついてきた。
「鈴音さんってソシャゲやるんですか？」
「あら、意外かしら？」
「意外ですよ。鈴音さんはこういうのには疎い感じかと」
「とんでもないわ。ソシャゲは私の生きがいだから」
「い、生きがいですか……？」
「そうよ。ガチャを回すために私は生きているの。正直ゲームの内容ってどうでもよくてね、課金そのものだったり、各ゲーム内におけるＳＳＲとかの最上級レアを引き当てることが好きなのよね」
射幸心を見事に煽られているのか……。
なんだか徐々に鈴音さんの化けの皮が剝がれ始めている気がするんだけれど、これは僕の気のせい、で済まない感じになってませんかね……？
「要くんはガチャって好きかしら？」

「え？　ま、まあ嫌いじゃないですけど、僕は無課金派なのであまり引けなくて……」
無駄に使えるお金がない、という学生らしい理由が僕を無課金派に所属させている。
「そうよね、その年頃だとガチャにお金を使っている場合じゃないものね」
「そうなんです」
「じゃあ――私がお金を出してあげましょうか？」
「へ？」
「お金を出してあげると言ったの」
「な、なぜ？」
「ショタには――じゃなくて、要くんには目を輝かせてガチャを遊んで欲しいからよ」
ショタって言ったよね!?
「さて、まずはこんなもんでどうかしら？」
鈴音さんが僕の眼前で万札を扇状に展開し始めていた。
「す、鈴音さんっ!?」
「さあ受け取りなさい要くん、遠慮はいらないわ。満足にガチャも出来ない男の子なんて可哀想で見ていられないんだもの」
「ま、待ってください！　そんなの受け取れませんから！」

扇状の万札は合計で二〇万くらいありそうだし、この人どんだけ僕にガチャさせるつもりなんだ……っ！

「あぁもしかして、現金だと今すぐガチャが出来ないからクレカの方がいいのね？」

「へっ!?」

「ええ分かったわ要くん、これが私のクレカよ。好きなだけ使ってくれていいからね？」

光沢のある黒いカードを手渡そうとしてくる鈴音さん。

これブラックカードってヤツじゃ……っ!?

「ほ、ホントに待ってください鈴音さん……っ！　現金だろうとクレカだろうと受け取れませんからっ!!」

「どうして？」

「どうしても何も、そんなの受け取ったらただのダメ人間ですし……っ！」

僕は人様のお金でガチャを回すような男にはなりたくない。僕がなりたいのは、僕を寂しさから救ってくれた《お姉ちゃん》のように、誰かを救える人間なんだ。

「な、なんて……――」

すると鈴音さんは感極まったように目元を潤ませ、

「――なんていい子なのかしら……っ！」

ぶわぁぁぁ、と洪水のように涙を流しつつ、鈴音さんは僕を慈しむように抱擁してきたのだった。――ど、どういうことなの……っ!?

「すごいわ要くん！　いい子ね要くん！　お金の誘惑にあらがうだなんて大人でも難しいことなのに、要くんはこんなに小柄な体であらがうことが出来てしまうのね……っ！」

「い、言っときますけど僕もうじき高校生ですからね!?」

なんで園児くらいの子供を褒めるかのような扱いを受けてるんだろ！

ていうか鈴音さんもう化けの皮完全に剝がれちゃってるよね!?

この人重度のショタ好きなんでしょ恐らく！

ガチャ大好きなショタコンってなんだよ！

「あぁ……私ったら要くんの愛らしさに歯止めを壊されてしまったのね……ノータッチの精神を貫いていたつもりだったのに……」

ノータッチも何もあんた初邂逅時に思いっきり僕の頭撫でてましたよね!?

「なら、もういいわね。私は要くんの前では本心を隠さないことにするわ」

どうかかくして

「さて要くん、私の目的はもう分かっているわね？」

「な、なんのことですか……？」

「私が要くんのお部屋をお掃除しているのは、合法的に要くんの日常生活に入り込むためなのよ」

いきなりなんのカミングアウトしてるんだこの人！

「これから毎日お世話してあげるからね？　お掃除やお洗濯はもちろん、ご飯も全部作ってあげちゃうし――あ、そうだ、一緒にお風呂にも入ろうね？　キレイキレイにしてあげちゃうから」

「か、勘弁してください……っ！」

「遠慮しなくていいのよ？　要くんが望むならもっとすごいことだって……――きゃっ、この先は口に出しては言えないわね……」

や、ヤバい……！　完全にヤバいよね!?

拝啓父さん母さん、僕はもうダメかもしれません……っ！

美人お姉さんとの生活を夢見てはいたけれど、こういうのじゃないんだよ……っ!!

なんかもっとこう、優雅でのほほんとした感じがいいのに！

「さてと、じゃあお掃除をさくっと済ませたら、汚れを落とすために私と一緒にお風呂に入りましょうか」

「な、なんで僕まで……っ!?」

「なんでって、要くんもお掃除のお手伝いをしてくれているわけだし、舞ったホコリが要くんを汚しているのは間違いないんだもの。だから……ね？」

「ぼ、僕用事があるのでちょっと外に――」

「――用事なんてないわよね？」

「な、ないですごめんなさい……っ」

真顔で詰め寄られた。怖かった。

「あら、謝ることが出来るだなんて、とってもいい子ね。じゃあいい子の要くんはお掃除が終わるまで待機してなさいね？」

「は、はい……」

「さてさて、それじゃあお風呂も沸かしておきましょうねえ」

そんなわけで、僕は鈴音さんの掃除が終わるのをジッと待つことになった。

嗚呼、僕の清楚神はいずこへ……。

※

――一時間後。

「さぁて、お掃除が終わったわ。お風呂もとっくに沸いているみたいだし、早速入りましょうか。ね、要くん？」

ぴかぴかになった僕の部屋で、鈴音さんが衣服を脱ぎ始めていた。

「ま、待ってください鈴音さん！　ホントに入るんですかっ？」

「当然よね。――あぁ大丈夫。今回は取って食うなんてことはしないから」

今回は……っ⁉

「さあほら、私も脱ぐんだから要くんも脱ぎ脱ぎしちゃってね？」

言いながら、鈴音さんはどんどん脱いでいく。エプロンを外して、ニットセーターも脱いで、ロングスカートまで脱いで、ついには下着姿に……と思いきや――

「……あれ？　水着ですか？」

そう、あらわになったのは下着じゃなく水着だった。ビキニではあるけれど、フリルがついた清楚な感じのヤツだ。色は白。

――ていうか待って！　水着を着込んでるってことは、最初からお風呂に入るつもりで僕の部屋に来てたってことなの⁉

「あら要くん、何を絶望したような表情を浮かべているのかしら。もしかして水着じゃなくて裸の方が良かったとか？　もぅ、えっちね」

あなたの計画性の高さに絶望しているだけなんですが！

……でもこの感じ、正直嫌いじゃない。

ハチャメチャに振り回され、もてあそばれるこの感じは、少しだけ《お姉ちゃん》を想起させてくれる。もしかして鈴音さんが《お姉ちゃん》本人なのかな？

「ところで要くん、どうかしらこの水着？」

鈴音さんが白いビキニ姿でセクシーなポーズを取り始める。深い谷間を強調したり、臀部を強調したり……もはや感想としては素晴らしいのひと言だ。なんかもうジッと見ていることが出来ないくらい扇情的というか、ビキニ自体はさっきも言った通りむしろ清楚系なんだけれど、鈴音さんの体がえちえち過ぎて清楚は別次元に旅立ってしまっていた。

「あら要くんったら、お顔が真っ赤よ？」

「だ、だって鈴音さんがそんな格好だから……っ！」

「あぁもうっ、ウブウブな要くんも素敵っ♪　もういいわ私の感想なんていらないから要くんも水着に着替えて早いところ一緒にお風呂に入って汚れを落としちゃおうねっ！」

そう言って僕にトランクスタイプの水着を手渡してくる鈴音さん。

「よ、用意してくれたんですか？」

「ええ、元々持っていたのよ」

「なんで男モノの水着を持ってるんですか!?」
「もしもの時に役立つかと思って災害セットと一緒にね」
非常食みたいなノリ!?
「それより要くん、一人でお着替え出来る？　出来ないなら手伝ってあげるのだけど」
「で、出来ますから先にお風呂場まで行っててください！」
「手伝いたかったのに残念だわ」
もはや本性を隠すつもりがないんだね……。
「じゃ、必ず来てちょうだいね？」
この隙に逃げようかと思ったけれど、それはさすがに不誠実だからやめることにして、僕は大人しく水着に着替えた。それから緊張と共に鈴音さんが待つお風呂場に移動する。
「あら～、水着はぴったりだったようね？　ふふ、良かったわ」
風呂場への戸を押し開けると、鈴音さんは洗い場に佇んでいた。僕もその場に入ろうとしたものの、正直狭くて躊躇する。完全に一人用なんだよね、このお風呂場。洗い場と浴槽に一人ずつなら、なんとか二人で入れるだろうけれど……。
「どうしたの要くん？」
「え？　あ、あの……狭いから入りづらくて」

「しくしく……いきなりお風呂の間取りをディスられて非常にショックだわ」
「べ、別にディスったわけじゃ……！」
「――でもね要くん、狭いからこそ、いいことだってあるのよ？」
鈴音さんは悲しげな表情から一転、目をきらんと輝かせたかと思えば――僕の手を引っ張ってお風呂場に強制入場させたのだった。
「わわっ……！」
引っ張られた僕は意図せずして、鈴音さんの懐に飛び込んでしまう。次の瞬間には、ふにょん、と鈴音さんの胸元に顔を突っ込ませていた。や、柔らかい……！
「ふふ、いらっしゃい。狭いとこうして密着出来るのだし、悪いことばかりではないでしょう？」
「ふごご……！」
悪いことではなくても不健全ではある気がして、僕は離れようとするのだけれど、
「ダメよ要くん。離れようとしてはダメ。プライドなんか捨てて密着しちゃおうね？　親御さんが居なくて寂しいでしょうから、今はいっぱい甘えてくれていいのよ？」
そう言って鈴音さんが僕をより強く抱き締めてくる。ふにふにのおっぱいに包まれてすごく気持ちがいいものの、しかしだ。そのおっぱいから顔を上げて僕は反論する。

「ぷはぁ……ぼ、僕はもう親に甘える歳じゃないですし！」
「じゃあ私のことを恋人だと思ってくれていいのよ？　年上の恋人に甘えるのは当然のことよね？」
「こ、恋人⁉」
「そうよ要くん。ふへへ……私は今だけあなたの恋人よ？」
なんか悪い笑顔になってるんだけど……っ！
「は、離してください！　今の鈴音さんは恋人じゃなくて変人です！」
「そうね、変人で結構よ。もうたまらないわ、要くんのほっそりとした体って素敵よね」
「ふあっ！」
顔に頬ずりされ、僕は変な声を出してしまう。
「あらぁ、可愛い声ね。もっとそういう声を聞かせてくれる？」
「い、イヤですぅ！」
「あぁんっ、ダメよ要くん。そんなに暴れたら危ないわ」
僕は身をよじって鈴音さんのハグから必死に脱出を図ろうとする。
しかしそれがいけなかった。
ほのかに湿ったお風呂場のタイルが、身をよじる僕の足元をずるんと滑らせ——

「——ぁ」
そうなった時にはもうどうしようもなくて、僕は背中から倒れていく。
鈴音さんをも巻き込んで、直後には——
どんがらでげでんっ。
と盛大な騒音と共にお風呂場の床に体を打ち付けていた。
いてて……。とりあえず意識は無事だけれど、やけに息苦しいことに気が付いて、僕は衝撃で閉じていた目を開ける。
——と。
「い……っ⁉」
目の前に、ぱつんぱつんの桃があった。
桃というか、鈴音さんのお尻だった。
何がどうなってこんな状態になってしまったのかはてんで分からないのだけれど、僕は鈴音さんの臀部に顔面を圧迫されてしまっていた。
「やんっ……くすぐったいわ……」
僕の息遣いが大事な部分に当たっているからか、鈴音さんは体を悶々と震わせていた。
その一方でドン！　ドン！　と隣の部屋と下の部屋から何かを叩くような物音が聞こえ

てくる。それはこっち側の隣室住人であるいなほさんと、下の部屋の住人であるゲーム廃人さんが奏でる壁ドンと天井ドンの音だった。

……多分僕たちの転倒がうるさかったんだと思う。

ごめんなさい！　と心の中で謝罪しつつ、僕は鈴音さんのお尻をどかそうとする。口元が塞がれているので、どいてくださいの意味を込めて鈴音さんのお尻をぺちぺち叩く。

「あぁんっ……要くんったら、こんな時にスパンキングだなんて……！」

「んんー！（違いますよ！）」

「というのは冗談で、ええ、分かっているわ。今すぐどいてあげるからね？」

鈴音さんはお尻を上げてくれた。それから僕を気遣うように抱え起こしてくれる。

「大丈夫だった？　怪我はない？」

「……い、一応大丈夫です」

「ふふ、私のお尻はどうだったかしら？」

「……なんですかその質問」

ハリがあって最高でした、とでも正直に言えばいいのだろうか。

「なるほど、ハリがあって最高だったのね？」

心を読まれた……っ!?

「それと、いなほちゃんたちに本来の意味での壁ドンをされてしまったようだし、ここからは大人しく湯船に浸かっちゃいましょうね？」
そんなこんなで、僕たちは狭い湯船で向かい合うように座って、なんてことない話をし始めるのだった。

※

やがて僕たちはお風呂から上がった。その後は鈴音さんに町案内と称されて、千石町を久しぶりにきちんと見て回ることになった。
「あんなところにコンビニってありましたっけ？」
「この間オープンしたのよ。前まではアダルトショップだったのだけど」
「イヤなコンビニですね……」
散歩も兼ねて、僕たちは歩きで千石町の風景を観察していた。
「それより要くん、そろそろ疲れたんじゃないかしら。おんぶしてあげましょうか？」
「外に出てまだ一〇分くらいですけど⁉」
どんだけ低体力に見られてるの僕！

「じゃあおててくらいは繋ぎましょうね？　迷子になられたら大変だもの」
鈴音さんが僕の手をそっと掴んできた。ドキッとしたけれど、その動揺を表に出したら尋常じゃなく可愛がられそうな気がしたから、僕はグッとこらえてみせた。
というか。
何気に鈴音さんが車道側を歩いているので、僕はそそくさと場所を入れ替わる。
「あら、どうしてそっち側に行ったの？」
「ぼ、僕男ですから、車道側を歩くべきかなって」
「――っ、素敵！　お小遣いあげちゃう！」
鈴音さんがまた万札を扇状に展開してきたんだけど！
「し、しまってください！　受け取れませんから！」
そもそも一瞬で展開したけどどういう技術なの？　マジシャンか何か？
「あぁ……要くんは謙虚でいい子ね。お金に目がくらまないだなんて……」
鈴音さんが感激しながらお金をしまっていく。
「それはそうと要くん、あなたは車道側に行く必要はないのよ。私が車道側でいいの」
「？　どうしてですか？」
「ショタのために死ねるなら――私は本望よ」

そう語る目はガチだった。素直にかっこいいって思ってしまったんだけど。
「あ、でも待って。そこにジムがあるからちょっと行ってくるわ」
急にそう言い出したかと思えば、鈴音さんは歩道の隅に向かっていく。
ジムって何？　もしかして某位置ゲーやってるのかな？
「おまたせ。それじゃあ行きましょうか」
結局車道側を鈴音さんに取られつつ、僕たちは引き続き町を見て回っていく。
一〇年前に比べると、さっきのコンビニのみならず色々と変わっていた。
だからきっと――……《お姉ちゃん》も変わっているはずだ。
隣の人がその変わった姿なんじゃないかと、僕は少し疑いの目を持ちつつ歩いている。
そうじゃない確率も当然高いから、あくまで数ある可能性のひとつとして見ているだけだけれど。
「そろそろお昼ね。どこかで昼食を食べるとしましょうか」
市街地を練り歩いていると、時間の経過が早かった。
「あそこの喫茶店がおすすめなのだけど、どうかしら？」
鈴音さんは目の前に迫っていたオシャレな喫茶店を指差した。
なんだろう、タイミング的にここを狙って来た感じがするよね。

「なんでおすすめなんですか？」
「ふふ、入れば分かるわ」
不敵な笑みだった。何が待ち受けているんだろうか。
僕は鈴音さんと一緒に目の前の喫茶店に足を踏み入れていく。
すると――
「いらっしゃいませーっ！」
と、弾けた笑顔で僕たちを出迎えてくれたホールスタッフのお姉さんに、僕は見覚えがあった。
「あれ……一夏さん？」
「うわっ、要っちと鈴音っちじゃん！」
そう、そのホールスタッフは一夏さんだった。ヒラヒラのめっちゃ可愛い給仕服を着用していて、白ギャルウェイトレスとでも言えばいいのか、とにかくキュートだった。
「ゴミ出し後に戻ってこないと思ったら、そのままバイトに行ってたんですね」
現状、動画投稿だけじゃ生活が厳しいのかな。ちょっと世知辛い。
「なんで来ちゃうかなぁ。鈴音っちさあ、これもう完全にわざと乗り込んできたよね？」
「ダメだったかしら？」

「ダメじゃないけどさぁ……ハズいじゃん。微妙にこれ、似合ってない気もするし」
一夏さんは給仕服を見下ろしながら照れていた。
「あ、あのっ、僕は可愛いと思いますよ。絶対にもっと胸を張るべきです」
この格好で動画を出したらバズって登録者数が伸びるんじゃないかって思うほどだし。
「そ、そうかな？　えへへ、ありがとね要っち」
「要くんに褒められるだなんて羨ましいわ……一夏ちゃんの家賃、今月は二倍ね？」
「なんでっ!?」
そんな横暴なひと幕もありつつ、僕と鈴音さんは席に通された。ナポリタンが一番のおすすめとのことで、僕たちは二人ともナポリタンを注文した。
「美味しいですね」
手元に届いたナポリタンを早速食べ始めているのだけれど、とても美味だ。
「あぁ、いいわね～。お口の周りを真っ赤にしてナポリタンを頬張るショタって素敵……」
対面に座る鈴音さんが変なことを言っているけれど、僕は気にしないことにした。

※

その後、ナポリタンを完食した僕たちは一夏さんに別れを告げて、町の行脚を続けた。
そんな時間はあっという間に過ぎ去って、時は夕暮れ。
そろそろかりん荘に戻らなきゃいけないので、僕たちは帰路についていた。
こうして夕暮れの町を歩いていると、ふと一〇年前のことを思い出す。
僕と《お姉ちゃん》が出会うのは圧倒的に夕暮れの時間が多かった。夕暮れに外で遊ぶ僕と、放課後ゆえに自由な《お姉ちゃん》が、ちょうどよく噛み合っていたんだと思う。
（結局……どうなんだろ）
今日は一日中鈴音さんと一緒に居たけれど、鈴音さんが《お姉ちゃん》かどうかは正直分からない。だから少しだけ、探りを入れてみようと思った。
ここでひとつ注意すべきなのは、あなたが《お姉ちゃん》ですか？　と単刀直入に聞いてはいけないってことだ。いけないというか、意味がないというか。恐らくだけれど、鈴音さんが仮に《お姉ちゃん》だったとしても、そんな直接的な質問をしたところで答えははぐらかされると思う。それであっさりと認めるくらいなら、そもそもあんなメモ用紙は入れてこずに今の時点で普通に会ってくれているはずだ。
普通に会ってくれない時点で、《お姉ちゃん》はきっと僕が自らの手で正解を導き出す時を待っている。だから僕は直接的な質問をせずに、遠回りに探っていくしかないんだ。

「鈴音さんってもしかして、子供の頃からずっと千石町で育った人ですか？」
迂遠な探りとしてそう尋ねると、鈴音さんはキョトンとし始める。
「いきなりどうしたの？」
「え？　あ、いや、その……」
もし鈴音さんが《お姉ちゃん》でもなんでもない場合、下手な探りは「なんでこんなに図々しく色々と聞いてくるの？」と不快感を与えてしまう可能性がある。
だからその辺りも考慮して、きちんとした理由と共に尋ねなければならないよね。
「え、ええとですね、いきなりそんなことを聞いた理由としては、鈴音さんの人となりを知ってもっと仲良くなりたいなって思ったからです」
「あら、そうなのね」
「はい。それで、鈴音さんってずっとこの千石町で育った人なんですか？」
「どう思う？」
質問に質問で返されてしまった。
これは……どういう反応なんだろう？　答えるつもりがないってこと？　鈴音さんが《お姉ちゃん》だから？　あるいはただの興味本位でクイズを仕掛けてきただけ？
「さすがにノーヒントじゃ難しいかしら。でもこんなのクイズとして面白いわけでもない

のだし、正解を早速教えてあげちゃうわね。ええそうよ、私は千石町生まれで千石町育ちなの。あぁでも、大学の時だけ上京していたわ」

お、いきなり普通に答えを教えてくれた……？

となると、鈴音さんは別に何も隠しちゃいない＝《お姉ちゃん》ではない、のか？

でも僕をこういう思考に持っていかせて、自分から疑いの目を外すのが目的かもしれないわけで……。

それこそ、鈴音さんは大学時代を除けばこっちにずっと居るっぽいし、だったら当然のように一〇年前もこの町に居たはずだ。

依然として候補ではある。

今探れるのはせいぜいこの程度だろうか。

わずかな収穫ではあるけれど、でも鈴音さんが一〇年前もこの町に居た、っていうのはそれなりのヒントではあるはずだった。

「へえ、じゃあ鈴音さんはこの町が好きなんですね」

僕は探りを終わらせ、話の雰囲気を世間話に移行させていく。

「上京したままでいよう、とは思わなかったんですか？」

「要くんに出会えたことを思えば、この選択で良かったと思うわ。まさか都心では出会えなかった理想のショタにこんな田舎で出会えてしまうだなんてね。ふふ」

ブレないなこの人……。

「ねえ、ところで要くん」

西日がその角度を鋭くし始める中で、鈴音さんがふとこう尋ねてくる。

「なんで要くんは今日、こんなにも律儀に付き合ってくれたのかしら？」

「え？」

「お掃除の時間もそうだし、お風呂もそうだし、町案内という名のこのデートじみた何かもそうだけれど、こうした行動はすべて、ショタ好きお姉さんであるこの私の欲望の趣くがままに行なった気持ち悪い行為なのよね」

「ええと……自分を卑下し過ぎでは……？」

「でも事実でしょう？　そして要くんはそんな気持ち悪い行為から本気で逃げ出そうと思えば幾らでもトンズラ出来たはずよね？　なのにそうしなかったのはどうして？」

「それは――……」

鈴音さんの観察がしたかった、って事情もあるけれど、でも一番はやっぱり――

「単純に、鈴音さんとの親交を深めたかったから、ですよ」

そう、それに尽きる。

《お姉ちゃん》捜しとか抜きにして、僕は鈴音さんと仲良くなりたかったのだ。
「それと、鈴音さんが少し寂しそうに見えたので」
「寂しそう？　私が？」
「鈴音さんの本心が実際どうかは分からないですけど、僕が勝手にそう思ったんです」
鈴音さんはかりん荘の大家さんをやっているけれど、それは自分で望んだことなのかなってふと考えてしまって――
だって若いのに大家さんって珍しいっていうか、それこそ実家の所有物件を無理やり任されたとか、そういう事情があるような気がして――
もし、ソシャゲとショタが大好きというその個性的な趣味が、押し付けられた役職に抱く不満からの反動で来ているモノだとすれば、それを少しでも満たしてあげたいな、と僕はそう思って今日一日付き合っていた部分もあった。
「あら、それは考え過ぎよ」
鈴音さんはおかしそうに笑ってみせた。
「大家は好きでやっていることだし、ソシャゲとショタはずっと隠れた趣味なのよ。特にソシャゲは結構昔からやっているの。初めてやったソシャゲは怪盗ロワイ〇ルだったわ」
「なんですかそれ」

「えっ、知らないの？　今も続いている古豪よ？」
「僕はソシャゲの古豪と言えばグラ〇ルのイメージですかね」
「そ、そんな……」
鈴音さんがショックを受けたようにたじろいでいた。
「どうしたんですか？」
「私は今、ジェネレーションギャップを痛感しているわ……歳は取りたくないものね」
つー、と頬に伝う一粒の輝きを見て、割とダメージを受けていることを悟った。
だからそれ以上は無駄に踏み込まず、僕は静観を続けて。
それからややあって元に戻った鈴音さんは――
「いずれにせよ、今日は付き合ってくれてありがとうね、要くん」
「いえ、どういたしまして」
「きっと要くんみたいに私を受け入れてくれるショタは二度と現れないだろうから――」
そう言って鈴音さんは弾むように前に出て、くるりと振り返って僕の顔を覗き込む。
「――割と本気で狙っちゃおうかしらね」
「えっ、それってどういう……？」
「はてさて、どういう意味でしょう？」

「り、理想のショタとして束縛し続けるとか、そういうおぞましい意味が込められていたら僕はイヤですよ!?」

「う～ん、どうかしら？　でもひとつだけ言えることがあるとすれば、困り顔の要くんってやっぱりラブリーだわ、ってことよね。ふふ」

からかうように笑うその表情に、僕は――

「……」

また《お姉ちゃん》を想起する。

けれど証拠が何もない以上、《お姉ちゃん》であると指を差すことは出来なくて。

だから結局はまだ――調査中、としか言えない状態が続きそうなのであった。

幕間　《お姉ちゃん》との思い出　Ⅱ

『ねえ要くん、君には隠し事ってある？』

ひとけのない夕暮れの公園で、ぼくはその日もおねえちゃんと会っていた。

『隠し事？』

『そう、隠し事。私に言えない何かがあったりしないかな？』

『うーん……特にないと思うよ？』

『そうなの？　じゃあおっぱいとお尻だったらどっちが好きか言えるよね？』

『えっ？』

『おっぱいとお尻だったらどっちが好きか言えるよね？』

『こ、答えなきゃいけないの……？』

『言えるよねえ～？　だって隠し事はないんだもんねえ～？』

おねえちゃんは悪い顔をしていた。

『さあほれほれっ、要くんはおっぱいとお尻だったらどっちが好きかね？』

『ぼ、ぼくは……えっと……――ど、どっちも好きっ』

『わお、欲張りさんだ。でもそれはちょっと欲があり過ぎるよね。不健全っていうかさ、このままだと要くんがスケベな男の子に育っちゃいそうだから、そうならないように私が今から矯正してしんぜよう』

『へ？』

『ちょっとこっちに来てっ』

『わわ……っ！』

ぼくは公園近くの雑木林に連れ込まれ、壁ドンならぬ木の幹ドンをされてしまう。

『な、何するの？』

『おっぱいもお尻も大好きな要くんを矯正するのっ。にひひ～、どんだけ大好きなモノだろうといっぱい味わえば飽きちゃうよね？　だからはいっ、まずはおっぱいから♪』

おねえちゃんはそう言うと、ぼくの顔にふくよかな胸を押し付けてきた。

『むぐっ……！』

『そしてそして～、要くんはがら空きの両手を私のお尻に持ってこようね～？』

おねえちゃんがぼくの手を自らのお尻に誘導させてしまう。

直後にはぼくの手にむにっと柔らかな感触が訪れた。

お、おねえちゃんのお尻だ……。

顔はおっぱいに包まれて、両手はお尻を掴まされ、ぼくは変な気分になってくる。

『どうかな～要くん？　これをずっと続けていればおっぱいにもお尻にも飽きて、きっと紳士な男の子に育ってくれるよね？』

『わ、わかんないよ……！』

『そっかぁ。じゃあ要くんがしっかりと紳士な男の子に育ってくれるかどうかをこの目で見守っておかなきゃだね』

そう言っておねえちゃんはぼくにおっぱいとお尻を堪能させ続ける。

とても気持ちがいいけれど、これって多分とてもイケないことで――

だからぼくにもひとつ、誰にも言えない隠し事が出来たような気がした。

『そ、そういえば……おねえちゃんには隠し事ってあるの？』

『隠し事？　うん、そりゃあいっぱいあるよ。女の子は謎多き生き物だからね☆』

続きは、6月19日発売のファンタジア文庫で！

©Yamato Kamizato, Neibi 2020